

跡が、さらにその南西側には浦城の支城であった
尼子館があります。

また城の南麓には三浦氏の祈祷所の真言宗常福院
が位置し、境内には五輪塔2基・宝篋印塔1基があり
ます。さらに高岳山々頂には副川神社の本宮、登山入
り口には前堂が鎮座しています。浦大町の南に位置す
る浦横町には板碑、そして丁場標があります。

街道は、五城目街道入り口を過ぎ真坂村を出て、J
R奥羽本線を南西にまたぎ夜叉袋村に入っていきます。

真坂村

真坂村は南北に細長い街村をなしており、道は拡
幅されていますが道筋は藩政期と同じです。

〔参考資料：歴史の道調査報告VI「北部羽州街道」

秋田県教育委員会〕

“菅江真澄も歩いた歴史の道「羽州街道」”から

NTT東日本秋田支社

まつのき

八郎潟町 夜叉袋 ^{まつのき}松ノ木

「マツ」の付く地名は多い。古くから松を神聖視
する習慣があり、松を祝木として扱い「神の来る
のをマツ、幸福の来るのをマツ」の意。「木」や
「本」は「モト」の意で、「末」に対する語。

(1987年三浦鉄郎著 新編・秋田の地名)

みくらはな

八郎潟町 真坂 ^{みくらはな}三倉鼻

1. みくらはな

戦国時代、檜山城と土崎湊城の接点。そして急
坂、悪路からして難所と言われ、能代からは潟の
西岸を通して土崎にでたもの。荷物輸送は潟船で
運んだ。真澄は文化3年(1806)頃、頂上の露天の
地蔵を遠くからスケッチしている。「ミクラ」の

山名は、神座(かみくら)の転訛だろうか。八郎潟
を一望のもとに眺められる名所だったので、明治
天皇もお寄りになっている。

(続、あきたむかしむかし 秋田魁新報社)

2. みくらはな

以前は御鞍鼻とも書いているので、湖に突き出た
馬の鞍に似た山の先端から出た地名であろう。た
だしそこには姥御前神社が建って有名な伝説があ
り、多くの人の崇敬を集めていることから「御」
をつけたものか。伝説は「三倉鼻由来」「秋田往
来」「三倉鼻略縁起」などが伝えられている。
(中略)

この伝説の中に、長者が住んでいて三つの石倉
を建てるほど栄え、地名も三倉にしたという。秋
田の三湖伝説の主人公である八郎太郎伝説の一つ
として、地名と共に語り伝えられているのが面白

い。菅江真澄(江戸時代の紀行家)は「三鞍波南、
山の高う崎へたるをくにうど・という。三のくら
てふこととなん。はたうまのしつくらにも似たれ
ばいふとも。いただきに石の地蔵を据へて地蔵峠
の名とも聞え、糠森にささやかなの桜さき、つくし
森の峽よりここの花の見へたるなどおもしろし」
頂上には地蔵様が立っていて、旅人の安全や、潟
の漁師の安全を祈ったことであろう。三倉鼻の下
の湖岸には洞穴があって八龍神社がある。祭神は
八郎太郎。

羽州街道はこの三倉鼻の險路を秋田実季(安東実
季)が文禄(1592-1596)から慶長(1596-1615)年間
に改修し、その後佐竹氏も手を加えた。また、景勝
地として人々はここで休息をとるようになったら
しく、茶屋 ができて大いに繁盛したという。

『梅津政景日記』には佐竹義宣が鷹狩をした記録
もある。

伊藤重左衛門の『抛人の日記』に「みくらはなに
て一ぱへ呑候代 六貫百文支払、一日市昼喰宿、
六日晚、虻川村泊り」と書かれている。田舎の下
級役人が旅の途中、大金を払うほど三倉鼻の茶店
で呑んだらしく、重左衛門は故郷、西仙北町強首
では眺められない八郎湖の風景を堪能したことだ